

楊逵と沼川定雄

——台湾人プロレタリア作家と台湾公学校日本人教師——

張季琳

- 一 はじめに
- 二 沼川定雄の生涯
- 三 台湾における沼川定雄
- 四 沼川定雄の文芸と台湾観
- 五 楊逵と沼川定雄
- 六 むすび

一、はじめに

昭和九（一九三四）年に、楊逵（本名楊貴、一九〇五〜八五）は日本語小説「新聞配達夫」によって当時ナウカ社から出版されていた左翼系文芸誌『文學評論』の懸賞募集の第二席（第一席なし）に入選した。この作品は同誌第一巻第八号（一九三四年十月）に掲載されている。こうして楊逵は日本の文壇に躍り出た最初の台湾人作家となったのである。「新聞配達夫」はこの後さらに魯迅の弟子である胡風（本名張光人、一九〇四〜八五）によって「送報佚」という

題名で中国語に翻訳され、上海の『世界知識』などに掲載された。

台湾文学史に重要な足跡を遺した楊達の生涯と彼の文芸活動を通覧しようとするとき最重要の資料は目下のところ、昭和五七（一九八二）年八月、当時七十七才の楊達がアメリカのアイオワ大学の招聘により渡米後、その帰途五十年ぶりで来日し、内村剛介、戴國輝両教授と行つた鼎談である。これは「台湾作家の七十七年〜五十年ぶりの来日を機に語る」と題して雑誌『文藝』の一九八三年三月号に掲載されている。この鼎談（以下「鼎談」と略す）で楊達は自身と交渉のあつたさまざまな日本人の名を上げているが、彼に最重要の影響を与えたのは何といつても日本人警察官入田春彦⁽¹⁾と台湾公学校教諭の沼川定雄と思われる。

「鼎談」によれば、楊達は公学校五年生になつてからの数年間、学校担任であつた沼川定雄の自宅でさまざまな学科について懇切な個人指導を受け、書籍を閲覧し、またしばしば寢食を共にしたのである。この沼川定雄先生との出会いは彼の日本人観を大幅に変えるものであり、同時に楊達の学問に基礎を与えるものであつた。

晩年の楊達がこのように懐しく回想する沼川定雄とはどのような教育者であつたのか、どのような生涯を送つたのか、また台湾でどのような活動を行つていたのか。これらのことは楊達研究者であれば誰でも関心を抱かずにはいらぬ問題であろう。数年来筆者は沼川定雄の教育者としての足跡を辿るために調査と資料収集につとめている。彼の台湾における教育活動についてはいまだ不明な点がいろいろと残されてはいるのだが、今とりあえず手元の資料に基づいて、沼川定雄の生涯を概観し、彼と台湾、彼と楊達の関わりについて若干の考察を試みることにしたいと思う。

二、沼川定雄の生涯

生涯を日本人と台湾人との教育に捧げた沼川定雄は明治三十一（一八九八）年一月十七日熊本県上益城郡秋津村大字沼山津一六五一番地にて誕生した。令息沼川尚⁽²⁾氏により提供された戸籍資料と筆者自身の調査に基づ

いて彼の略歴を表示すれば以下の如くである。

- ① 明治三十一（二八九八）年一月十七日誕生
- ② 明治四十三（一九一〇）年三月、熊本県立秋津尋常小学校を卒業
- ③ 大正五（一九一六）年三月、私立九州学院を卒業
- ④ 大正七（一九一八）年三月、台湾国語学校公学師範部甲科を卒業
- ⑤ 大正七（一九一八）年三月、台湾公学校教諭の免許を取得
- ⑥ 大正十五（一九二六）年三月、広島高等師範学校理科第一部を卒業
- ⑦ 大正十五（一九二六）年三月、修身、教育、数学教員の免許を取得
- ⑧ 大正十五（一九二六）年四月、台湾台中第一中学校の教諭になる
- ⑨ 昭和五（一九三〇）年四月、京都府立亀岡高等女学校の教諭になる
- ⑩ 昭和八（一九三五）年十月、熊本県立鹿本中学校の教諭になる
- ⑪ 昭和十（一九三七）年四月より鎮西中学校、熊本通信講習所、九州学院などで非常勤務
- ⑫ 昭和二十（一九四五）年三月より失明し、平成六（一九九四）年四月七日逝去

沼川定雄は戸籍では明治三十一（二八九八）年一月十七日、沼川十三郎の七男として生まれたと記されている。しかし、沼川尚氏によれば、本当の誕生日は明治三十年七月七日であった。当時は乳児がそのまま育つとはかぎらなかったもので、誕生後およそ半年経てから出生届を出すことが多かったという。定雄の父十三郎は小作人であり、また兄弟が七人もいたので、生活はきわめて貧しく苦しかったが、定雄は兄弟の中で一番勉強ができたので、父親は無理をして尋常小学校を卒業した彼を九州学院に入学させた。

九州学院とは、アメリカ福音ルーテル教会の伝道師 CHARLES L. BROWN（一八七四～一九二一）によって明治四

十三（一九一〇）年熊本県飽託郡大江村に設立された男子中学校である。明治四十四（一九一〇）年四月に第一回の入学試験が行われ、一二二人が入学したが、沼川定雄もその一人であった。創立当時の生徒の募集のありさまは『九州学院七十年史』に記されている。このとき「職員たちは手弁当で、⁽³⁾県下はもちろんあの当時の交通事情の中で、福岡まで足をのぼして生徒集めに」奔走したという。九州学院はキリスト教精神に則る私立中学であり、教師の中には外国人もいた。当時九州の「学習院」と呼ばれたこの学院でリトル・ゼントルマンの教育を受けた生徒はどちらかといえは裕福な家の弟子が多かつたが、⁽⁴⁾このような学校になぜ沼川定雄のような貧農の子が入学しえたのか、その事情は必ずしも明らかではないが、創立当初の学校経営は教会寄付金に大きく依存しており、父兄納付額の比率はきわめて小さいので、⁽⁵⁾恐らく沼川も何らかの優遇措置を受けたのであろうと推測される。九州学院は成立当初から生徒には日々の礼拝や聖書拝読が義務づけられている。沼川定雄が在学中キリスト教から多少の精神的感化を蒙つたことは想像に難しくないが、しかし、彼が洗礼を受け、キリスト信者になることはついになかつた。⁽⁶⁾

一二二名の第一回入学生は、厳しい学則のためかなりのものが落第、あるいは退学させられ、卒業のときには三分の一の四九名に減っていた。沼川定雄もその四九名の卒業生の一人として、大正五（一九一六）年三月に九州学院を卒業した。卒業後の沼川定雄はどうなったのだろうか。後年の回想の中で彼は以下のように述べている。⁽⁷⁾

私は母校の第一回の卒業生であります。即ち大正五年三月に母校プライドのシンボル「九學」の徽章を「KG」の金釦に惜別を告げて翌六年四月臺灣に渡り當時総督國語學校と呼ばれた謂はば師範の二部に入り七年四月には臺南に赴任し茲で異民族の教育に従事すること満四年——感ずる所あつてと云へば大袈裟ですが——廣島高師に入つて十五年三月卒業と同時に再渡臺し臺中第一中學に數學の教鞭を取ること同じく四年昨年五月縁あつて當地に參りました。

これによると、彼は卒業後の翌六（一九一七）年に单身台湾に渡り、七（一九一八）年台湾総督府の国語学校を卒業

後、台湾で四年間教育者の生活を送った。広島高等師範学校入学のため日本に戻るが、大正十五（一九二六）年同校を卒業の後再び渡台し、四年間数学を教え、昭和五（一九三〇）年に帰国したことになる。彼の台湾に於ける生活と教育、文筆活動については後にあらためて詳述することにする。

戸籍によると昭和二（一九二七）年一月七日台中で教鞭をとっていたとき、沼川定雄は九州阿蘇出身の後藤ヤエと結婚した。彼はこの第一の妻との間に三男一女をもうけている。台湾から帰国してまもなく沼川定雄は京都府立亀岡高等女学校に奉職した。

この女学校で彼は数学の教諭を勤めたが、幾何と代数の授業を担当していたらしい。筆者は亀岡時代の沼川定雄についてやや詳しく知りたいと思ひ、平成十一（一九九九）年五月に亀岡高等学校を訪ねた。そこで中尾俊明校長の協力を得て、卒業生名簿を閲覧し、沼川在任当時の卒業生約三〇〇人に問い合わせの手紙を出したが、やがてほぼ一〇〇人の方々からの返信を受け取ることができた。この内いく人かの方々は手紙の中に当時の貴重な写真を同封してくれた。すでに老境に入ったこれらの卒業生は往時をとっても懐しく回想しており、六〇年以上の歳月を隔てていながら、沼川先生の面影が彼女らの心の中にまだはつきりと残っていることがわかった。

これらの卒業生のさまざまな回想から自から亀岡時代の沼川の風貌が彷彿する。すなわち当時の女生徒の目に映った沼川先生は長身で、色淺黒く、面長、口元は小さく、優しい目に黒縁の眼鏡をかけた壮年紳士であった。穏かではあつたが、がっしりとして堂々とした背の高い彼の外見は一部の生徒には男性的だという印象を与えたようである。⁽⁸⁾このように沼川先生は多くの女生徒に慕われ、彼女らの憧れの的になつた。⁽⁹⁾しかし、教師としての沼川が生徒達に敬われ慕われたのはなにも彼の外見のためだけではなかつた。彼の懇切丁寧な数学教育と教え子への誠意ある姿勢や暖かい配慮こそが女生徒達の尊敬と信頼を勝ちえたのである。特に誰かをえこひいきすることなく、また出来不出来で差別することなく、生徒が理解するまで根気よく解りやすく説明してやまないという彼の指導が生徒の心を捕えたの

である。このような指導のおかげで、いままで解らなかつた数学が解るようになり、嫌いな数学が好きになつたという生徒は少なくない。ここで第二六回（昭和六年三月）卒業生小島千代乃氏の筆者宛書簡の一部を引いてみよう。⁽¹⁰⁾

沼川先生が亀岡高女へご赴任になりました昭和五年には私は亀岡高女の五年生で早速学年担任として卒業するまで一年大変お世話になりました。背がお高くてハンサムでお優しくいつもにこにこして生徒をお導き下さいました。勿論當時の日本は男女の規律が厳しくたとえ信頼する先生と雖も特別の事情のない限りは女生徒とお若い男の先生が個人的にお話させて頂く事は出来ませんでした。然し沼川先生は極めて実直な先生でお優しく生徒の信望もお厚かつたので皆お慕い致しなつておりました。私は今もう八十五才半の老婆となりましたが、今でもクラス会（毎年一度開いています）には沼川先生の思い出が話題に上る位印象深い先生でいらつしやいました。ご指導頂いた教科は幾何と代数でございました。教え方が親切でいねいで非常に分かりやすく、数学きらいであつた者も沼川先生に教えて頂いてから好きになつたと言う程でございました。

授業中数学だけでなく人生論的な話もしたようである。そして沼川が担任を務めていた学級では、次に引く第三十一回（昭和十一年三月）卒業生水口賀代氏の書簡の一節が示すように、生徒達は彼からいろいろな訓話を聴くことができたのである。⁽¹¹⁾

担任ですので学級会でご指導頂くこともあり、いろいろと訓話をしていたのですが、忘れてしまいました、唯一つ今も覚えていることがあります。「汽車というものは、レールの上を走っているから、安全に目的地に達するのである。人間も人の道を踏みはずさず人生の目的を達しなければならぬ」入学間もない頃であつたので、小学校と違い何とよいことを教えて下さることかと感心し、固く守ろうと決心したものです。

また放課後にはバレーボール部の部員の指導に当つた。⁽¹²⁾極めて教育熱心であつた沼川定雄は、しかし、ひたすら謹直で真面目一方というわけではなかつた。生徒の間では顔が長いため「馬川先生」というあだ名で呼ばれることも

あったが、これはもともと生徒の前で沼川自身が披露したあだ名であった。⁽¹³⁾第三十一回卒業生山本敏子氏は次に引く筆者宛書簡の中で沼川先生の剽軽な一面を伝えている。

沼川先生はとても真面目なおとなしそうな良い先生でした。副読本を教えてもらって居りました。今は何処にいらつしやるのか、お元気なのか、残念ながら私は全然存じません。とてもお背の高い立派な方で他の先生方よりは深く印象に残っています。特に覚えておりますことは、いつも卒業式の時に後で余興をされますがその時とても面白い早口言葉を聞かせてくださいまして、それだけは今も覚えていますのでそれだけでも書いておきます。ほんとうに面白い言葉で少々はづかしいのですが、寄宿舎へ帰って皆でよくまねたものです。オーゼンツルマン ショウベン アンド ババタレ スカンケンカンコンペン ト ハイーツトスベルハゲアタマ ゼンネン チュチュールハイ スワルトバートル ダンチリ オストアンデルマンヂェウ ソーメンハリガネシャントシテール マレン テツポータマカタクテノマレン 以上でございます。

沼川は時には生徒達の前で台湾の話をした。第二十七回（昭和七年三月）卒業生岡田良子氏は筆者宛書簡の中で以下のように記している。

沼川先生は本当に人格者でした。よく時間の後五六分台湾のお話をよくして下さいました。本当によき先生でした。

第二十九回（昭和九年三月）卒業生清水志な氏は筆者宛書簡の中で以下のように記す。

沼川先生はお言葉通り立派な先生でした。亀岡高女に着任され、台湾の言葉で私達は聞き取れぬ言葉で笑わせてくださいました。

また、第二十六回卒業生（昭和六年三月）荒木ふく氏は筆者宛書簡の一節で次のように述べている。

一九三一年の二月頃から京都御所や地方裁判所、島津製作所などへ見学につれて行っていただきました。また春

浅い保津川の畔を先生とクラスメートとよく散策いたしました。先生はよく「ここ亀岡よりよほど『台中』の方が都会的、文化的」だとおっしゃいました。

このようにして生徒達から慕われ愛された沼川先生は、昭和八（一九三三）年突然亀岡を去り、九州に転任してしまつた。この転任は学年の初めではなく、同年の八月のことであつたので、生徒達の間にも多少の動揺をもたらしたようである。沼川自身は昭和十（一九三五）年十二月発行の亀岡高等女学校『同窓会報』中の「舊職員よりのお便り」沼川定雄先生⁽¹⁾の欄で同校退職のいきさつを次のように述べている。

一見實に不可解な退職をいたしまして最早や一年有半に垂んとしていますが其の間寒さにつけ暑さにつけ且つは年頭に於て皆々様より有難い御玉書に接しつ一つ々御禮も申しでないことを先づ衷心御詫び申します。私は敢て不可解な退職と申しましたが茲に恥を忍び一切を皆様にぶちまきて皆様の御芳情に御詫びし且つは今後も恐らく非常の御無禮をするだらうことを豫め謝し併せてかねて心の重荷をサラリと取除きたいと存じます。

昭和六年十月上旬御校を辭し一先づ閑地につく心算にて歸郷いたしました所さる先輩の切なる御厚情により再び本縣下一中學校に教鞭を取ることになりました實に二枚舌を使つた羽目に陥り心中自責の念に驅られてしまつたが忘れもせぬ昨春三月一日卒業式をすました夜愚妻出産をすると同時に精神に異状を呈しまして以来一ヶ年季節々々の變り目にはその發作状態を斷續し學校も欠勤勝にてその間幾度も辭職も申出ましたが先輩の方の御厚情と御鞭撻によつて今日に至りましたところ最早やどうにもならなくなつてこの三月を限りに職を退くことに決定いたしました。御校退職の理由も實に是にあつたのでした。京都在住中にすでに斯くなる豫感を抱いて斯くとは云はず退職方を校長先生に御願申したので餘程不審に思召された様ですし皆様にも一つの謎を投げかけたことと存じます。

啄木の歌に「石をもて追わるる如く・・・」とありますが謎の退職に加へて石をもて追はるる如くでなく實に

夜逃げの如く立ち去つたこと皆様方の御芳情に對し申譯なく終生の恨事として私の胸の一隅に縋つています。現在の如き状態になる前微でございませうが出發に際してあれやこれやの手違ひをいたしましたしてしみじみと御別れのできなかつたこと、過去を思ひ将来を考へ列車の隅に無心に眠る子供の顔を暗くながめ華かなるべき京阪神の街の灯を憂鬱に抹殺して車窓にもたれた時の心中は永久に忘れぬ一つでございます。

ここで沼川は昭和十(一九三五)年熊本県立鹿本中学校退職について語りながら、二年前の亀岡高等女学校退職のときの内情を告白しているのである。つまり彼の妻は亀岡高等女学校にいる頃からすでに精神的な病を患つており、それになつたるさまざま問題が沼川の亀岡高等女学校退職を余儀なくさせたものと思われる。当時の女生徒の中にはこっそりラブレターを送つてくるものもいた、と沼川尚氏は語っている。このような事件は沼川家の亀岡居住を困難なものにしたにちがいない。また尚氏によれば、亀岡にいて一年半ほど経た後、沼川定雄は妻子を熊本の親類に預け、単身亀岡に暮らしていたが、妻の健康がそれでも好くならないので、結局亀岡高女を辞めて、九州に戻つたということである。

沼川定雄先生が突然学校を去ることがわかると、彼を慕い敬つていた女生徒達はみな悲しんだ。沼川先生との別れについては第三十一回卒業生の石原一枝氏が筆者宛書簡の中で以下のように述べている。⁽¹⁵⁾

女学校三年迄御担任いただいた先生で懐かしく思い出しました。先生のお別れの会の時全校生が声を上げて泣いた記憶が蘇つて来ました。小遣いの小父さんが皆で歌を唱つてお別れかと思つたが、節がおかしいので二階にあつた講座に上がつて行つたところ、皆の泣き声だったのでびつくりしたと話されたと聞きました。それ程皆から慕われておられた先生だったので。当日クラス全員が泣き顔で先生を囲んで撮つた写真があつた筈と探したのですが見あたらず残念です。

『龜岡高等女学校職員名簿』では、亀岡高女時代の沼川定雄については以下のように記している。

と結婚する。尚が生まれたのはその二年後昭和二十(一九四五)年のことである。しかし、この昭和二十年沼川定雄は突然失明してしまうという不運に見舞われる。尚氏の話によれば、彼は同年三月当時囑託として勤務していた九州学院の勤労働員の生徒を引率して名古屋まで行ったが、その帰りに急に発病し、頭がふらふらし、目がかすんでしまった。苦勞してやつとのことで熊本に帰ることができたが、それ以来目がみえなくなってしまった。ただし、白いものだけはなんとなく感じることもできたという。昭和六十(一九八五)年発行の彼の一級障害者手帳には「右眼：虹彩復癒着、仮性白内障。左眼：単性視神経萎縮、右光覚弁、左眼前手動弁」と記されている。この失明の原因はよくは分からないが、やはり心身の過勞が祟ったのではなからうか。沼川定雄の長女岩崎絹子氏(七十二才)の筆者宛書簡によれば、天文に詳しい沼川定雄は星を見るのが好きで、自家製の望遠鏡でよく天体観測をしていたという。このことが失明の直接原因とは思われないが、彼の目には悪影響を及ぼしたのであろう。失明後は台湾総督府勤務による年金と助産婦をしていた妻シキの収入で生計を立てた。日常生活はたいいてい一人でなんとかできるようなったが、世を去るまでの五十年間一七〇坪の屋敷から一步も外を出ることがなかったと沼川尚氏は語る。沼川定雄は平成六(一九九四)年四月七日九十六才で世を去った。死因は老衰である。生前よく自分の人生は前半が一番よかったと令息尚氏の前で述懐していたという。

三、台湾における沼川定雄

当時の台湾では差別教育が行われ、日本人子弟は「小学校」に、台湾人子弟は「公学校」に通うように定められていた。公学校の教師になろうとするときは日本人でも台湾人でも台湾総督府によって経営される国語学校で研修を受けなければならなかったが、日本人教員の年平均給料はおよそ台湾人教員の二・五倍から三・五倍にまで達している。⁽¹⁶⁾

大正六(一九一七)年四月台湾に渡った沼川定雄もまずこの国語学校に入学し、台湾語はじめ、修身、教育、理科な

どを一年間勉強した。大正七（一九一八）年三月発行の雑誌『臺灣教育』第一九〇号（五十七〜六十頁）には「國語學校通信」と題したコラムがある。ここでは三月二十五日の卒業式での民政長官の訓示を全文掲示した上、「小學師範部」日本人卒業生十六名、「公學師範部甲科」日本人卒業生六十四名、「公學師範部乙科」台灣人卒業生一二五名、「國語部」卒業生二十八名、「在學中皆勤者」十四名の名前、出身地、出身学校および生年月日を一覽表にして示している。ちなみに、在學中皆勤者十四名はすべて台灣人であった。「公學師範部甲科」という欄には「熊本九州學院沼川定雄三一、一、一七」と記されている。沼川定雄はこのように卒業と同時に「甲種臺灣公學校教員」としての免許を取得したのである。大正七（一九一八）年五月十日発行の『臺南廳報』第三七三号の六十八頁には「任臺灣公學校教諭（給月俸二十三圓）沼川定雄 大目降公學校勤務ヲ命ス」という「大正七年三月三十一日」日付の辞令が載っている。こうして沼川定雄は初任地の台南の大目降へ赴任したのである。当時の大目降公学校は現在の台南県新化国民小学である。筆者は一九九九年夏同校を訪ね、陳振坤校長、林世英教頭と黃春雄氏の厚意により、当時の職員名簿を閲覧することができた。沼川定雄のことは以下のように記されている。

氏名：沼川定雄

府県族籍：熊本縣平民

舊藩：肥後

生年月日：明治三十一年一月十七日

出生地：本籍地と同じ

原籍地：熊本縣上益城郡秋津村大字沼山津千六百五十一番地

現住地：大目降公學校宿舍

年号月日	任免賞罰事故	官衙
大正七年三月二十五日	本校公學師範部甲科ノ課程ヲ履修シ正ニ其業ヲ卒ヘタリ因テ之ヲ證ス	國語學校長
三月二十五日	甲種臺灣公學校教諭タルコトヲ免許ス	臺灣總督
大正七年三月三十一日	任臺灣公學校教諭	臺灣總督府
同日	給月俸二十三圓	同
大正七年三月三十一日	大目降公學校勤務ヲ命ス	臺灣總督府
同年十二月二十一日	事務格別勉勵ニ付金三十七圓ヲ賞與ス	同
大正八年三月三十一日	給月俸二十五圓	同
同年九月三十日	給月俸二十七圓	同
同年十二月二十一日	事務格別勉勵ニ付金七十圓ヲ賞與ス	同
大正九年九月三十日	給八級俸	臺南州
同年十二月二十一日	事務格別勉勵ニ付金百圓ヲ賞與ス	同
大正十年三月三十一日	給月俸五十八圓	臺灣總督府
同年六月二十九日	地方學事講習會講師ヲ命ス	臺南州
同年九月五日	大正十年度地方學事講習會ニ際シ勤勞不尠ニ付金六十五圓ヲ給ス	同
大正十年九月三十日	給月俸六十一圓	臺南州
大正十年十一月十二日	林鳳營公學校校長ヲ命ス	臺南州

これによると、当時の沼川は学校で教師として働くだけではなく、事務的な仕事にもかなり携わり、また地方の講習会にも顔を出していたようである。おそらく彼の真率な性格と実務的な能力が高く買われたのであろう。彼は大目

降公学校に三年間勤めた後すぐに大正十年十一月二十二日に新設されたばかりの林鳳營公学校⁽¹⁸⁾の校長に抜擢された。

しかし、林鳳營公学校長として着任して間もない沼川は、その年の秋に広島高等師範学校の入学試験に合格し、十二月に第二十一回生として入学を許可された。⁽¹⁹⁾ 令息尚氏の話によると、合格した沼川が上司に挨拶に行ったところ、上司はとても喜んでくれ、広島高等師範学校へ研修しに行くことに同意し、いまだ四ヶ月しか勤めていなかった校長職を休職扱いにし、学資の便宜をも計ってくれた。⁽²⁰⁾ 筆者は現在の台南県林鳳營国民小学を訪ね、楊若芸氏、沈文再氏の協力のもとに同校の資料を閲覧したが、同校の歴代校長の中で、沼川定雄が任期のもっとも短い校長であることが分かった。

大正十一（一九二二）年四月に沼川定雄は四年制の広島高等師範学校の理科第一部⁽²¹⁾に入学した。ここで彼は主に数学と物理を学び、大正十五（一九二六）年三月に卒業し、修身、教育、数学の教員免許を取得した。⁽²²⁾ 彼はただちに台湾に戻り、台中州立台中第一中学校（五年制）の教諭となる。当時中学校に進学しえた台湾人は少数で、台湾各中学の生徒の過半数は日本人であったが、この台中一中だけは生徒の大多数が台湾人で占められているという特異な中学校であった。⁽²³⁾

実際沼川定雄が赴任した翌昭和二（一九二七）年の五月にはこの台中一中で生徒による大規模なストライキ事件が起きている。それは生徒寄宿舎の日本人炊事係夫婦の不誠実な行為に端を発するもので、結局生徒全員が休校し、最後には警官も出動した。この時の校長は下村虎六郎、すなわち『次郎物語』の作者として有名な下村湖人であった。彼は六十名あまりの台湾人生徒を退学させるなど極めて強圧的な方法で事態を收拾した。⁽²⁴⁾

沼川定雄がこのストライキ事件の渦中であつてどのような態度をとったかは分からない。ただし、この事件の直後、同年の七月より沼川定雄は宿舍の舎監の一人になつている。⁽²⁵⁾ 後述するように沼川定雄は台湾語をかなり理解し、台湾人との交友を心がけていたので学校側は沼川定雄を舎監に加えることによつて台湾人生徒との融和をはかったのでは

なかるうか。また、沼川尚氏の話によれば、失明後の沼川定雄の日常生活ではラジオはほとんど一日中付け放しであったが、ある日はたまたま『次郎物語』に関する放送を聞いて驚き、下村湖人は元の上司で、とても気むずかしく、人の話をまったく聞こうとしない人だった、と漏らしたそうである。

なお、昭和二（一九二七）年十二月一日発行の『臺灣教育』第三〇四号（二四頁）には、同年の十一月五日の日付で「支那廈門汕頭、廣東及英領香港へ出張ヲ命ス 中教諭 沼川定雄」と記してある。沼川定雄は台中州立第一中学校に在任していた時、かつて「出張」で中国や香港へも赴いたことがあったのである。生徒の修学旅行の引率か、あるいは当時台湾で行われた日本全国校長会議の見学旅行の世話役として出張したのか、その目的が何であったのかはよく分からない。台中一中第十四期生（一九二七年入学）の陳亨卿氏は筆者宛書簡で以下のように述べている。

すでに六十八年前のことですから、沼川定雄教諭に対する印象といつても、かすかな記憶しかありません。私が覚えていることは、彼は体格がとてよく、馬のようにながしりとしており、とても親しみやすい性格の持ち主だったことです。下村虎六郎校長のもっていたような優越感などは全然ありませんでした。（筆者訳）

これより先彼がいまだ台南で教鞭をとっていたころ、彼は地元の台湾人富豪の令嬢と親しくなった。沼川尚氏の談話によれば、この令嬢は沼川のためによくお弁当を作つてきてくれたという。沼川定雄も彼女に好感を懷いていたが、そうこうするうちに広島高等師範学校合格の通知がきて、彼は一時日本に戻らねばならなくなった。そして四年後再び台湾にやつてきた時には、この令嬢はすでに結婚してしまつたあとであった。結局、沼川定雄は台中州立第一中学校で教えていたとき、遠い親戚の紹介で同じ九州出身の後藤ヤエと結婚することになる。しかし、前述のようにこの妻は精神的な病いを患つていたので、昭和五年五月二十日に沼川定雄は妻のために四年間の台中生活を切り上げ、日本に帰つて亀岡高等女学校に赴任したのである。⁽²⁶⁾

沼川定雄は他の日本人教師よりもずっと台湾語を上手に話すことができた。そのため、尚氏の話では、台湾人と日

本人の紛争が起こつた時、よく調停役を勤めたという。また沼川定雄は喫煙を好み、いわゆるヘビースモーカーになつてしまつたが、これも彼が台湾時代に身につけた習慣であつた。つまり地元の台湾人と談話する際、彼らから煙草を勧められると、彼らの感情を損なわないようにどうしても自分も吸つてしまう。こういうことが度重なり、結局、煙草を手から離すことができなくなつてしまつたのだ、と九州学院時代の生徒津末秀夫氏は語つてゐる。⁽²⁷⁾なお、尚氏の話では沼川定雄は台湾でよくマラリアに罹つた。また紛争を調停したり仲裁したりするために夜外出するときには、必ずステッキを手にもつて、なるべく鉄道線路に沿つて歩いたという。台湾の百歩蛇はとても恐ろしい毒蛇で一度噛まれたら百歩も歩かぬうちに必ず死んでしまうので、外出時にはこの百歩蛇に出会わぬため十分な用心が必要になるからである。いづれにしても沼川定雄が自分の教え子だけでなく多くの台湾人との友好を心がけ、また彼らからかなりの信頼をかちえていたことは確かである。

四、沼川定雄の文芸と台湾観

若い時の沼川定雄は一種の文学青年であつた。彼が広島高等師範学校に在学中も専攻した数学の成績は思うようにならなかつた。彼自身も苦勞したようである。彼自身の本当の興味関心はむしろ国文にあつたが、国費で広島高等師範学校に派遣されておこなうながら、途中で専攻を変えるのはよくないと考えていたため、国文に転向することはなかつた。しかし、広島高等師範学校の教官から、お前はむしろ数学より国文に才能があると言われることがよくあつたと尚氏は語つてゐる。

沼川定雄は少なくとも台湾時代にはさまざまな創作を行つてゐた。特に大目降公学校時代沼川定雄は生活がかなり安定してゐたため、小論を著し、短歌を作り、雑誌『臺灣教育』などに寄稿してゐる。筆者が閲覧し得た沼川定雄の作品は以下のものである。

- ① 沼川生「同化問題側面觀」(小論、九年九月二十日作)
 (『臺灣教育』二二二号、三六〇三七頁、大正九年十月)
- ② 沼川生「南國の秋」(短歌十首、九年九月十三日作)
 (同二二二号、四〇頁、大正九年十月)
- ③ 沼川生「みなしご」(短歌十二首、九年十二月十四日作)
 (同二二四号、三〇頁、大正十年一月)
- ④ 沼川生「心の聲」(小論、十年一月十四日夜作)
 (同二二五号、三九頁、大正十年二月)
- ⑤ 沼川定雄「父は逝ぎぬ」(短歌八首、九年一月作)
 (同二二七号、四四頁、大正十年四月)
- ⑥ 沼川定雄「生のあと」(短歌十六首、十年三月十三日作)
 (同二二七号、四四〇四五頁、大正十年四月)
- ⑦ 沼川藻花「教へ子」(短歌四首)
 (同二二九号、五〇頁、大正十年六月)
- ⑧ 沼川藻花「魂の獨唱」(短歌八首)
 (同二二九号、五〇頁、大正十年六月)
- ⑨ 藻花生「小山羊」(童謡一首、十年八月十四日作)
 (同二二三二号、五〇頁、大正十年九月)
- ⑩ 臺南にて藻花生「海の遠鳴り」(短歌六首)

⑪ むまかわ生「思ひ出」(短歌八首)

(同二三三号、五一頁、大正十年九月)

⑫ 藻花「俳句」(二句、於圓山明治橋畔蜆茶屋)

〔臺灣時報〕昭和三年二月号、一一七頁、文苑「孕江選ゆうかり新年句會句抄」

沼川は上に掲げた亀岡高等女学校『同窓会報』所載の消息文の中で「石をもて追はるる如く」という石川啄木の歌を引いているが、彼の自作の短歌のかなり多くもの、つまり上表の⑦「教へ子」⑧「魂の獨唱」⑨「小山羊」⑩「海の遠鳴り」は啄木の三行詩の形をとっている。沼川が啄木の強い影響を受けていたことは明らかである。

小論「心の聲」は公学校の台湾人生徒の行動を冷徹に観察したものである。彼は一方で公学校の児童の言動に利己心が著しいことを鋭く指摘し、他方で生徒のこの利己心を教育の方便にしてはならぬことを説き、主体的自己の確立を提唱する。つまり沼川定雄は台湾人の教え子を無責任に肯定するようなことはなく、彼らの生活の問題点をもよく認識していたのである。

運動會をしてみても、農業の實習をやらせてみても、作業を命じても、また一寸遊戯をのぞいてもなすことするること公学校児童の言動に、利己心の反映が如何にも多く目につくことは、お互いに實際教育に携わつてゐる者のひとしく實見し経験する事實である。或ひは過言であるか知らぬが利を打算することなくしては彼等は行動せぬと私は認める。

利己心の當然赴くところは、物質である。金である。彼等の心のどこをどうきざんでみても、金の影の喰いこんでゐないところはないやうに感ぜられるのは、如何にも遺憾に堪えない。

彼等の心胸を根強い拜金思想が占領しているといふよりは、寧ろ彼等にあつては拜金性となつてゐるのである。

紙幣を、あまり眼前に、くつつけすぎてゐるから、外に見るべき美しいものなどのあることは、てんで分らない。實際教授に當たつてこれがためもどかしいいや、なげなくまたいやになることを再々經驗させられる。

吾々實際家は兒童の訓練に當つてはよほど、注意しなくてはならない。それは、ややもするとこの利己心を利用しやすいくことである。これを利用すれば形式的の効果は、たちまちめきめきとあらはれる。つまり「斯うすれば、斯く斯くの利益がある。」と利をもつて、いざなひ説けば、彼等には、最も好く徹底するからである。従つて進んで、それが、實行されることになる。しかしこれは決して眞の人間を作る所以でないことを知つて、こんな彌縫的な手段を取つてはならない。何となれば、斯かる教育によると、時と場合の如何に拘はらず、己を利すべく打算を忘れないく眞に價値ある香ばしい麗はしい行爲はできない。換言すれば、ただ物欲に驅使される奴隸を養成するのみであるからである。

すでに物欲の奴隸となれば、かのおめでたい人間や、權威の前或ひは因襲の膝下に、羊のように従順にひざまづく人間と同様に自己が人としての全的存在を忘れ果てたあはれな、そして潤のない冷かな、殺風景な人間である。こんな人間ばかりでは、決して社會の文化が向上し發展することは、覺束ない。

茲に於て、吾々は單に小なる一訓練としてではない。實に自覺のある、自己を發見し、創造創作を營み、痛切なる人間味を味ひ、人として寔に意義ある生を刻むべき人間の養成、教育といふ上から、彼等あはれな兒童を救濟せねばならぬと思ふ。これがためにはここに如何に新眞なる教育が提唱されねばならぬ。終りに私は、利己心の打破といふことは、又公學校教育の理想的到達點からながめても、まつききに解決されねばならない問題の焦点であるといふことをつけ加えて、諸賢の御批正を仰ぎたいものである。

しかし、沼川定雄の台湾人生徒への批判の奥底には彼らへの深い愛情があつた。このことは次に引く「教へ子」と題する短歌四首にはつきりと表されている。

飽き来れば腰掛けの上に横たはる 教へ子もあり いぢらしきかな

よごれたる中にも尊さいとしきの かがやけるなり 小さな教へ子

教卓のま下にありてゆうべ見し 芝居のまねする 教へ子ふたり

あまたいる教へ子が顔ぬちに その上のふるき 友の面しのぼる

これらの作品が発表されたのは大正十(一九二二)年、つまり楊達が大目降公学校を卒業した年、楊達がちょうど沼川先生の世話になっていた頃のことである。

沼川定雄の台湾と台湾人に対する根本姿勢をはつきりと示しているのは、彼が大正九(一九二〇)年に発表した「同化問題側面観」という小論である。当時の在台日本人の多くがそうであつたように沼川も台湾人を日本人に同化させることを是とする立場に立つており、そのような同化主義が彼の論旨の根底にある。しかし、沼川は同化するものすなわち日本人と同化されるものたる台湾人との間に精神的結合があつてはじめて真の同化が可能になるということを強調する。

凡そ同化という事は、同化する者すなわち同化者、同化されるもの即ち被同化者の間隙なき精神的結合をまつて、はじめて實現されるものであらうと思ふ。これは餘りに分かりきつた、あたりまへな事實である。しかも私はこれについて大いに論ずる實際問題があると思ふ。

沼川から見れば当時の日本人(彼自身の語では「母國人」)が台湾人に対する態度は決して望ましいものではない。

一視同仁! 公平! 平等! ……これらは母國人が臺灣人へのぞむ際の常套語である。又吾々は彼等にのぞんだ場合には、必ず領臺前後の比較をもつて彼等の幸福を説く。如斯は、慥に一方法たるを失はぬ。しかし私は一言したい。吾長所をもつて風俗習慣歴史等すべてが異なる民族(単に本島人のみではない)に説くとも、どこまで、之を長所または美點として歓迎するかは疑問であるまいか。

つまり、日本人の側に、台湾人が独自の風俗習慣歴史をもった民族であるという意識が乏しく、そのため日本人が台湾人に対してややもすれば恩着せがましい態度や押しつけがましい姿勢を取り勝ちであるが、これでは精神的結合に基づく真の同化を達成することは無理であると言っているのである。ここで沼川は自己の中学時代つまりミッションスクールであつた九州学院に在学していた頃のことを回想する。当時の九州学院にはキリスト教を真つ向から振りかざして生徒に臨む「直線的」教師とキリスト教をむしろ奥深くに蔵して生徒に接する「曲線的」教師の両通りがいた。それまでキリスト教というものにほとんど馴染みのなかつた生徒は「曲線的」教師に親み、「直線的」教師を嫌忌していた。このことを想起しつつ沼川は台湾人同化という目的に至るためには「曲線的」な手段方便をとるべきであると説く。もつとも沼川は台湾人との友好をただの方便と考えているわけではない。台湾人独自の歴史・文化・生活を理解し、彼らの感情を尊重し、自由平等と互恵の立場から彼らと日本人とを融和させていかねばならず、決して強圧的、独善的で性急な同化策をとるべきではないということ沼川は強調する。

故に吾々は三千年の歴史を有する國民であればこそかく感ずるのである。故に吾々は、斯く感ぜよと命令的に彼等に臨むべきではあるまいと思ふ。しかく彼等に自ら感ぜしめなくてはならない。訓辭的、專制的、自誇的ではない。彼等にはこの誇り、この幸福を視る目はないものと見ねばならぬ。私は再び言ふ。吾長所を以て、眞向うより彼等に臨んでも、之を長所として、どこまで歓迎するかは疑問である。

最後に沼川は真の同化のためには日本人全体の自覚が必要であることを次のように説いて小論を締めくくっている。要は母國人全體の自覺に俟つより外はない。それがためには、單に積極的に本島人にのみ同化事業を施すことより一進みて（或いは退いて？）一般内地人に對する消極的同化事業が起こされなくてはならない。眞に自由平等的な、民族的な偏見から超脱した内地人が必要である。かくて自づと彼等新附の民から敬ひ慕はれ、和親の中に隙間なき精神的結合が形成されなくてはならない。これが引いては新附民の自覚を促がし眞の同化に向かふ第一

歩ではあるまいか。

ここで彼の言う「一般内地人に對する消極的同化事業」とは具体的にどのようなことを指しているのか甚だ曖昧である。ともあれ、沼川はこの小論で日本人の側が誤った優越感を懐き、自分たちの思想や生活様式を台湾人に強制してはならぬこと、日本と台湾の同化はあくまで精神的結合によって達成されるべきことを説いている。沼川の論旨に矛盾がないわけではない。沼川をも含めた当時の在台日本人一般考える同化とは結局台湾人を日本人化してしまうことである。沼川の言うように台湾人の歴史、文化、生活に独自の意義を認め、それらを尊重するということは台湾人と日本人の別異性を認識し、それを保持せよということであるから、両者を單純に同化させることはできなくなる。平等互惠と同化とは結局両立しえぬ概念なのである。年若い教師沼川定雄の頭の中ではまだまださまざまな事柄が未整理であつたと言わざるをえない。もつとも同化が台湾人の国民意識の形成を阻害したとするのは早計であろう。藤井省三氏が「言語的同化を通じて本国人化されたという台湾人の植民地経験は、世界史上稀に見るものであつたが、いつばうでこれが共同意識の形成を助け、台湾大（サイズ）のナシヨナリズムが萌芽したのであつた」と論ずるように、同化政策と台湾ナシヨナリズム形成の間には一種微妙な逆説的な関係も認められるのであるから、沼川定雄の同化論もいづれより大きな視野からの再考が必要となるのだあろう。ともあれ、彼が「真に自由平等的な、民族的な偏見から超脱した」日本人として台湾人との「精神的結合」を少なくとも学校教育の場で真摯に追求したことは、彼自身の詩歌や後で引く楊達の回想が證明しているということができよう。

五 楊達と沼川定雄

楊達が学んだ台南の大目降公学校において沼川定雄が教鞭をとつたのは大正七（一九一八）年四月から大正十一（一九二二）年十二月までおよそ三年半の間である。この公学校に楊達が学んだのは大正四（一九一五）年から大正十（一九二一）

九二二)年までのことであつたと考えられる。彼は幼少年期に病弱であつたため九才になるまで公学校に入るのが遅れ、公学校五年生になつて担任の沼川定雄と知り合つたときにはすでに十五才になつていた。「鼎談」によれば、より先十四才の頃、父が面倒を見ていた行商人が日本人警察官に撲り殺されるという事件があつた。この事件から非常な衝撃を受けていた楊達にとつて、沼川定雄との出会いは彼の日本人觀を大きく終生するものであつた。この頃のことを楊達は一九八二年の「鼎談」の中で次のように回想している。

戴… 公学校では、楊達先生のことを大変にかわいがつてくれた日本人の教師がいたんでしよう。

楊… そうです。五年生からの担任の先生だつた。沼川定雄(ぬまかわさだお)という名前でした。学校を出たばかりで、二十一、二歳ぐらい。その当時は結婚もしていなかつた。私をかわいがつてくれて、しょつちゅう家へこいというんです。よく遊びに行きました。沼川先生の家へいくと、メシを食わせてくれるし、本がたくさんあつて、自由に読ませてくれた。先生のとこで泊まることも、たびたびでした。それだけじゃなしに、沼川先生は、私に代数から幾何から英語から、その他、基礎的な勉強をなんでも教えてくれました。沼川先生は、あとで台北一中の教師になつたと聞いていますが、……

内村… 特別な家庭教師をもつていたわけですね。

楊… そのとおりです。お蔭で、私は中学に入つてからは、勉強することがない。毎日、徹夜で本ばかり読んでいたので、授業中は居眠りばかりしていたんです。私は沼川先生と出会つて、日本人についての考え方が、だいぶ変わりました。日本の特殊な方面、たとえば、警察方面とか……そういう部分には、台湾人を虐める人間たちもいるけれども、こんなふうな少年の私をかわいがつてくれる日本人もいるのだと。沼川先生は、台湾人に対する優越感など、すこしもなかつた人でした。

また、一九七六年楊達が当時の台湾師範大学の学生であつた宋澤萊のインタビューを受けたとき、彼は以下のように

に述べている。⁽²⁹⁾

私には公学校時代（現在の小学校に相当）から一人の先生がいました。彼は独身で、私はいつも彼の宿舎に行き、そこで多数の種々雑多な本を読みました。しかし、私の興味はただひたすら小説にありました。一冊五六百ページの本であっても、しばしば一晩で読み終えてしまったものです。つまり小説きちが良かったのです。当時読んだのは日本の小説でしたが、ほとんどは翻訳類でした。私が好きだったのは帝政ロシア時代とフランス大革命時代の作品でした。その後、私が社会の暗黒を痛感して、出口を探そうと思つた時、彼らの小説は私にとっても大きな啓示を与えてくれました。すなわち、人間の世界は汚穢と暗黒に満ちていますが、しかし、それぞれの個人は工夫しながら自己を改善してゆくことが必要なのです。社会もまた改善されるようにできるだけ要求してゆくべきです。（筆者訳）⁽³⁰⁾

さらに、かつて楊逵の家に一年間滞在しながら、楊逵の談話を基に彼の伝記をまとめた林梵氏はその著作『楊逵畫像』⁽³¹⁾の中で以下のように公学校時代の楊逵を描いている。

楊逵は学校での態度はいつも非常に優秀であつた。課業の方はと言えば、日本語がとても流暢でほとんど訛りがなかつたので、いつもクラスの代表として講演のコンクールに参加していた。一年生から二年生に上がるとき第二席の成績をとつたほかは、卒業するまでいつもクラスの第一席を占めていた。このような成績だったので、故郷では才子と見なされ、学校でも先生達に好かれていた。特に五、六年生の時の担任の沼川定雄先生は楊逵の生涯ではじめて出会つた最も記念すべき日本人であつた。当時沼川先生は学校を卒業したばかりで、教育者としての情熱を抱いて偏僻の大目降公学校にやつてきて、全クラスの生徒の敬愛を勝ち得た。彼は当時若くてまだ未婚であつたため、放課後いつも楊逵を宿舎に來させて、話相手にしていた。彼はこの瘦せた小柄の生徒が本心から好きで、言葉と体で教えるだけでなく、楊逵にも代数や英語などの中学校の科目を教え始めた。彼の宿舎には

かなりの蔵書があり、楊逵もそれらを開いて読むのが好だったので、知らず知らず、視野がさらに広くなっていた。その中には、またたくさんの小説があり、日本語に翻訳された世界的名著をも含んでいた。楊逵はいつも精神集中して閲読し、広大な世界に沈潜していった。すぐには読み終えることができない本があるときは、それを借りて自宅に持っていったこともある。

楊逵はよく夜おそくまで小説を読んだので、翌日授業中よく居眠りをした。この居眠り仙人について楊逵の少年時の同級生は強い印象をもっている。一年生から六年生までずっと楊逵と机を並べ、また当時騎馬戦の戦友だった李朝泉氏が彼らの当時の読書ぶりを回想しながら、感慨深く次のように言っている。「楊逵は前世から書を読んでいたのだ。彼が勉強しているところをあまり見かけなかったが、いつも私達のクラスの第一席になっていた。これは前世から書を読んでいたのではないか。」(中略)

楊逵が五年生の時深刻な印象をもったことがあった。それはある日理科の実験をやるとき、公学校の中を探しても磁石はひとつもなかったのだ。沼川定雄先生は楊逵に隣の小学校に借りに行かせた。小学校の設備はかなり良く、地面には床板を敷いてあったので、必ず靴を脱いでから入らなければならないが、楊逵はこんな規則を知らなかったのだ。草履はきのままで上に入った。ここにおいて一度恥じをかいってしまったので、心の中でとても深い感慨が残った。同じ所に住んでいるのに、台湾人と日本人とはこんなに違っている。我々はみな破れた古着ばかり着て、多くの人々は痩せこけて、毎日素足で学校に通っていた。学校と言ってもただ何間かのあばら屋でしかない。すべての設備も粗末なものをできるだけ利用していたのに、日本人の学生たちはなぜいづれも顔が赤く元氣そうであんなに傲慢であるのか。もつとも甚だしいのは六、七百人もの生徒のいる学校で一つの磁石さえもなかった。数十人しかいない日本人専用の小学校に借りに行かなければならなかった。しかも彼らはとても友好的ではなかった。我々台湾人はこんなに人に及ばないのか。日常生活にも日本人の警察は町の父老を顎で使

うような態度をも思い出すと、心の中に思わず怒りがこみ上げてくる。年令の生長に従って、楊逵はますます日本帝国が植民地に加えた枷鎖を実感していった。どうやってそれを取り除くかの方法はまだ分からなかったが、仲間の間に自然にある種の默契があり、公学校の台湾人学生と小学校の日本人学生は常に些細なことで石を投げあつて、喧嘩した。天真の子供さえも結局彼らはもともと違う国の人間だということがわかったのだ。(筆者訳)

一方、一九八五年三月十三日から十五日まで台湾の『中國時報』には楊逵が口述し、王世勛が筆記した「我的回憶」が連載されたが、ここでは彼は沼川について以下のように語っている。(註32)

私が本格的に文学に興味を持ちはじめたのは、小学校の六年生から算えるべきです。あのとき私はすでに十五才になっていました(私は病弱だったので、九才になってやっと入学しました) はじめの五年間の教師はみな台湾人でしたが、六年生の時は沼川という姓の独身のある若い男性教師でした。彼は後年台中一中で教鞭をとっていたと聞きましたが、残念ながらずっと会うことができませんでした。おそらく今はもう故人になっておられるでしょう。私は小学校では成績はずっと上位でしたので、沼川先生は私を特別にかわいがってくれました。六年生のときよく私を自宅に招いて、私のために無料で将来中学に進学したら学ばなければならない英語と代数を教えてくださいました。彼のこの精神は今の時代の教師の中にはなかなか見あたらないものです。沼川先生は私に将来中学に進学したら学ばなければならない英語と代数を教えてくださいただけでなく、私のためたくさんの文学的な読物を提供してくれました。私はそこで書籍の中に没頭して、ついに寝食を忘れてしまうほどになりました。後、中学に入ってから、授業の内容を十分に把握できたため、すべての精神を課外読書に投入しました。いつも夜明けまでこれらの書籍を読み、昼間学校に行つてから教室でいびきをかきながら居眠りしました。これは私の文学的啓蒙時期の過程でした。今になつても文学は相変わらず私の生活の中心です。そして文学に対して深厚な興味がありましたので、私は日本へ渡り、文学を専攻しました。そこで当時の社会の不平等の現象を目のあたりにしま

したので、それが私その後台湾に帰って社会運動に参加する決心を促したのです。(筆者訳)

楊逵は「鼎談」と「我的回憶」の中で沼川先生について同じことを述べている。しかし、少年時から晩年に至る自己の文学経歴がまさに公学校六年生のときの沼川定雄先生との交流から始まることをはつきりと述べている点で、いま引用した「我的回憶」の談話はきわめて重要である。当時の台湾人が文学、特にいわゆる世界文学に親しもうとすれば、事実上日本語書籍に依存するほかはなかった。つまり台湾人の文学志望者は日本という窓口を必要としていたのである。楊逵の場合は、結局沼川定雄の書齋が世界文学への窓口となったわけである。

沼川定雄は楊逵を推薦し台北まで行かせて弁論大会に参加させたこともあった。楊逵はこのことを「我的回憶」の中で以下のように回想している

日本人の教育方法の活潑であることは、今の詰め込み主義の教育法とは全く比べられません。公学校六年生の時、私は台南州の代表として台北に行つて弁論大会に参加したことを今も憶えています。抽選で当つた題目は「川の中の魚」というものでした。私は魚についてはなにも知らなかつたので愕いてしまい、失敗してしまいました。しかし、今から思うと小学生にとつてはやはり魚を題目にするほうが現在の生徒がややもすれば顔をこわばらせて、八股文的な偉そうな理を説き、思考の筋を硬化させ、教条化させてしまるより何十倍も好いと思います。(筆者訳)

沼川定雄は楊逵の成績優秀を見込んで、彼が公学校を卒業した時に彼に台北の中学校を受験することを勧めた。この間の事情を楊逵は上に引いた「我的回憶」の部分のすぐ後で次のように語っている

公学校六年卒業後、私は当時六年生の教師沼川先生の提案に従い、台北に行つて高等学校の初級部を受験しました。沼川先生はなぜ私にこんな提案をしたのか。また私はなぜ近きを捨て、遠きを求め、(故郷の)台南一中を受験しなかつたのか。いまはもうはつきり憶えていません。おおかた彼は台北の高校を受験するほうが私にとつ

てよいと思われたのでしょうか。(筆者訳)

しかし、楊達の受験は失敗に終わった。⁽³³⁾その理由について楊達は同じ「我的回憶」の中で以下のように語っている。今回の受験は失敗してしまいました。私の成績から言えば失敗するはずではなかったのですが、受験する前からすでに失敗すべき運命が定められていたのです。私の成績の席次はいつも級の上位でしたから、失敗するわけありませんでした。しかし、失敗すべき運命とは日本人の植民地政策がもたらしたものです。小学校のときには、公学校と小学校とを分けていました。一般の台湾人子弟の多くは公学校で勉強し、小学校は日本人の子弟の学校で、その中には少数のお金持ちの台湾人子弟がいました。小学校の設備と教師の人材はみな公学校より優越していました。私が勉強していた公学校の隣はすぐ小学校でした。小学校の学生は貴族のようで、かつて公学校の学生と摩擦と紛争を起こしたことがあります。中学校の入学試験の題目は主に小学校の教材を中心にしていました。その意図は日本人の子弟を採用し、台湾人子弟を排斥しようということでした。したがって公学校を卒業した私のはかつて読んだことのない試験問題の内容を見ると、当然のことながら望洋の嘆きに襲われるしかありませんでした。(筆者訳)

つまり、台北の中学校の受験に関するかぎり、沼川定雄の楊達への配慮は実らなかつたわけである。今引いた箇所では楊達が語っているような当時の台湾の教育事情や台湾総督府の教育政策を沼川定雄はまだよく理解していなかったものと思われる。もつとも彼は当時まだ年若く、台湾に渡ってから一年しか経っていなかったため、教え子楊達への彼の厚意がかえってあだになったのもいたしかたないというべきであろう。

結局、受験に失敗した楊達は兄の世話で一年間製糖会社でアルバイトをし、翌年あらたに設立された台湾人子弟の入学できる台南二中(現在の台南一中)を受験し、第一期生として同校に入学した。ところが、入学した楊達は前述したようにもつぱら課外読物に没頭し、学校での授業ではもう自分の知的渴望をいやすことができなくなり、また童

養媳などの問題も起こったため、三年間の在学の後中学を退学し、大正十三（一九二四）年に日本へ留学する道を選んだ。この頃沼川定雄はすでに広島高等師範学校に入学していた。

前述の如く、昭和二（一九二七）年の五月、沼川定雄が在任していた台中州立第一中学校で大規模のストライキ事件が起きた。このストライキ事件は日本人炊事長夫妻への憤懣といふかなり單純なきっかけから発したものであるが、下村虎六郎校長の高圧的な手段により事件が紛糾するにしたがつて大陸系の抗日運動家や左翼運動家、さらには台湾本島の農民組合などが介入するようになった。楊達は台湾に戻つてから農民組合運動に本格的に関わることになる。したがつてもし楊達の帰台がもう少し早ければ、台中一中の事件の渦中で楊達と恩師の沼川定雄がいわば敵と味方としてあい目見えるということが充分に起こりえたであろう。しかし、楊達が台湾に戻つたのは、實際は昭和二（一九二七）年の九月であつたから、結局、彼と沼川先生が台中一中事件をきつかけに再会するといふことはなかつた。一九八五年の「我的回憶」では、楊達は沼川先生はもう他界したであろうと憶測しているが、実は、沼川定雄は一九八五年三月十二日の楊達の死後（享年八十）九年間も生き延びたのである。

六、むすび

本稿は楊達の恩師沼川定雄の足跡を辿り、彼の生涯と人物像、彼の台湾における生活と楊達との関わりについて概観考察したものである。肝心の沼川と楊達との交渉については関係者がほとんど物故しているため、細部について充ちた調査ができなかつたことは残念である。

しかし、今回の調査によつて、少なくとも教育者としての沼川定雄の実像をかなりはつきりと捉えることができたように思う。すなわち沼川定雄は生徒をその出身や能力で差別することなく、生徒それぞれの性格と理解力を充分に配慮した上で、彼らに懇切で温情ある指導を惜しまないといふほとんど理想的な学校教育者であつた。彼の台湾や台

湾人に対する根本姿勢は、彼の善意にもかかわらず、大きな矛盾をはらむものである。しかし、彼が楊逵をはじめとする台湾人児童に誠意と愛情をもって接したことは疑いない。

少年期に沼川定雄のような教育者にめぐり会えたのはやはり楊逵にとって幸運であつたと言えるであろう。少年くとも年若い楊逵に文学を志すきっかけを与え、彼の文学修業の基礎付けをした人物として、沼川定雄は楊逵の文学生涯に極めて重要な役割を果たしたのである。現代台湾の最重要作家の一人楊逵を文学に開眼させた沼川定雄は間接的なかたちで台湾文学の発展にも寄与したと言つても過言ではないであろう。

註

(1) 拙論「楊逵と入田春彦く台湾人プロレタリア作家と総督府警察官の交友をめぐって」、『日本台湾学会報』創刊号（一九九九年五月）参照。

(2) 一九九九年五月に筆者は電話帳に載っている熊本県および九州在住の沼川姓の諸氏に手紙を出してみたところ、福岡にいる沼川定雄の孫沼川健氏が見て、熊本にいる父親の沼川尚氏に知らせてくれたため、同氏と筆者は電話で連絡をとることができた。同年六月に筆者は熊本を訪ね、沼川定雄の自宅で彼の五男沼川尚氏と会うことができたのである。

(3) 『九州学院七十年史』（一九八一年）、七頁。筆者は九州学院の院長土山研三氏からこの『九州学院七十年史』を一部贈呈された。

(4) 第一回卒業生坂本雪太郎「思ひ出るまま」の文では、「其の時入學した者は大抵他の中等學校の入學不合格者であつた。私は隣の工業學校を外した。然し、九州學院入學者は相當に勤勉忠實にして希望に燃え、田舎から来た私などは最初は大分劈易した。何故か此頃から九州學院入學者には金持が多いという噂があり、實際そうであると思はれる」と述べている。『九州學院創立二十年記念誌』（一九三二年）、九三頁。

(5) 同註3、四〇七〜四一〇頁参照。

(6) 沼川尚氏の話によると、沼川家では代々浄土真宗の信者であり、定雄も晩年まで毎日仏壇に向かつて『阿弥陀經』を暗誦することを欠かさなかつたという。

- (7) 同註4、一〇〇〜一〇二頁には「感ずるままに」と題した第一回卒業生沼川定雄の生徒時代の回想文が収められている。
- (8) 第二十七回(昭和七年三月)卒業生瀬尾光代氏、第三十一回(昭和十一年三月)卒業生大坪一榮氏などの書簡による。
- (9) 第二十七回(昭和七年三月)卒業生大西フミ氏、第二十九回(昭和九年三月)卒業生前田琴氏などの書簡による。
- (10) 第二十七回(昭和七年三月)卒業生八木敏子氏、中川千恵子氏、第二十九回(昭和九年三月)卒業生桑田延氏、第三十一回(昭和十一年三月)卒業生浅田房枝氏、斉藤一枝氏などの書簡による。
- (11) 第二十九回(昭和九年三月)卒業生小泉靖子氏などの書簡による。
- (12) 第二十七回(昭和七年三月)卒業生松井光枝氏、第二十八回(昭和八年三月)卒業生山名文江氏、第二十九回(昭和九年三月)卒業生古川淑子氏、中村善子氏、第三十回(昭和十年三月)卒業生村山一女氏、第三十一回(昭和十一年三月)卒業生井上三代氏などの書簡による。
- (13) 第二十七回(昭和七年三月)卒業生塩貝美代子氏、石原一枝氏などの書簡による。
- (14) 第二十八回(昭和八年三月)卒業生松本喜光子氏は昭和十年十二月二十五日発行の『龜岡高等女学校同窓會報』に掲載された「舊職員よりのお便り」沼川定雄」を複写して筆者に送ってくれた。この文の日付は「昭和十年二月二十二日」となっている。
- (15) 他の多くの卒業生の方々は筆者宛書簡の中には、他にも沼川についてのさまざまな回想が記されているが、本稿では割愛する。
- (16) 李園會『日據時期臺灣師範教育制度』(一九九七年十月)、南天書局、二二〜九八頁。
- (17) 「大目降」は台湾原住民の平埔族語「TAVOCAN」の音訳で、「山林の地」という意味、鄭成功時代から漢人が入居し、開墾した地域である。大目降公学校は明治三十一(一八九八)年十月一日設立され、大正九(一九二〇)年に台南州新化郡の成立とともに「新化」と名付けられ、現在学生数は約二一〇〇人である。
- (18) 大正十(一九二一)年四月二十五日発行の『臺南州報』号外の告示によると、「六甲公學校林鳳營分校」は大正十年四月二十五日より「林鳳營公學校」と改名された。
- (19) 広島高等師範学校は後の広島文理科大学になり、現在の広島大学である。『広島大学二十五周年史』一一八頁には大正十五(一九二六)年卒業生の加藤惣一「文科第一部第二十二回生の記」という題で「広島高師第二十一回生は大正十年秋、各道府県庁で選抜試験を受け、十二月には既に入学許可された。翌年四月に入学したのである」と記している。おそらく沼川も同じ時期に受験したと思われる。

(20) 『龜岡高等女學校職員名簿』には大正十一年三月三十一日、林鳳營公學校長ヲ免ス。大正十一年三月三十一日、大正十年勅令第四三七号ニ依リ廣島高等師範學校在學中休職ヲ命ス」と記されている。尚氏の話を裏付けている。

(21) 『広島大学二十五年史』(二四頁)には、当時「理科第一部」の修学科目を次のように記す。「理科第一部(数学・物理学を主要科目) 修身、教育学、数学、物理学、論理学、生物学、心理学、天文気象、化学、国語、英語、図画及手工、体操」。

(22) 『龜岡高等女學校職員名簿』には、文部省の公文記録が「修身、教育、数学、教員免許令第三條ニ依リ免許ス」と記している。

(23) 台湾では明治三十一(一八九八)年から中等教育が実施された。しかし、この中等教育は当初は事実上日本人子弟だけのものであった。台湾人林獻堂らの設立請願により、大正四(一九一五)年二月三日に「臺灣公立臺中中學校」が設立された。これは最初の台湾人のための学校であった。この学校の校地、校舍などに要する費用はすべて台湾人の寄付によるものであったが、総督府はこれを公有として校長などは全部総督府から任命されるようになった。大正十一(一九二二)年四月一日「臺中州立臺中第一中學校」と改名された。当時の台湾では「第一」と名付けられた学校は全部日本人のための学校で、台湾人の学校で「第一」と称するのは同校が初めてである。これは第二代校長小豆沢英男(後、拓殖大学の学長)の努力によるものだ。『臺中一中八十年史』(一九九五年五月)にははっきりと記されている。筆者は現国立台中第一高級中學の教頭張永銘氏からこの『臺中一中八十年史』を一部贈呈された。

(24) 当時の『臺灣民報』や『臺中一中八十年史』所載の「臺灣光復前本校校長簡介」(二七頁)と梁忠錦「臺中一中抗日罷課事件」(三三五～三三七頁)などによれば、下村校長は日本人の炊事長夫婦を庇うため、事実を無視し、罪のない学生達を犠牲にした。この台中一中ストライキ事件について、特にこの事件において下村校長のといった態度については別稿で詳しく考察したいと思う。当時台中一中の生徒だった台湾人の回想では下村校長は彼らの憎悪的となっており、明石晴代著「次郎物語と父下村湖人」(勁草書房、一九八七年一月七日)の伝えるところは大きく食い違っている。

また、台中一中第九期生で(一九二二年四月入学、一九二七年三月卒業)、元台湾副大統領の謝東閔氏は筆者宛の書簡の一篇で以下のように述べている。「炊事事件については私は多少知っています。それは当時の台湾同胞は差別視されていたため、抗議事件を惹起したのであります。(中略)沼川先生のことに関しては、私には印象がありません」(筆者訳)。

さらに、台中一中第十四期生で(一九二七年四月入学)、戦前から台湾文壇で活躍している巫永福氏は筆者宛の書簡で以下のように述べている。「台中一中のストライキ事件は、張深切さんの話によれば、彼をはじめとする広東台湾独立運動分子の煽動に

よる争議でした。当時の下村校長は非常に厳酷だったので、退学させられた学生が相当多くでました。これは台湾教育史上の大事件です。楊逵が私に沼川定雄先生のことを話したことはありません。そして私も台中一中にはわずか二年間しかいませんでした。沼川先生についての印象は特にありません」（筆者訳）。

(25) 『龜岡高等女學校職員名簿』によると、沼川定雄は昭和二（一九二七）年七月十日付で舎監を命じられ、そして昭和三（一九二八）年九月十一日に舎監を免ぜられている。

(26) 昭和五（一九三〇）年三月九日発行『臺中州報』第四九三號（九三頁）には「昭和五年三月六日臺灣公立中學校教諭沼川定雄東京、京都、大阪、栃木、神奈川、三重ノ各府縣下へ出張ヲ命ス」と記す。また、昭和五年六月九日発行『臺中州報』第五一號（三〇六頁）には「昭和五年五月九日 給三級俸 臺灣公立中學校教諭 沼川定雄 京都府へ出向ヲ命ス」と記されている。また、昭和五年六月十三日発行『京都府公報』第三五四號（五一八頁）には「昭和五年五月二十日臺中第一中學校教諭沼川定雄 京都府立龜岡高等女學校教諭二任ス 三級俸給與」と記してある。これらの資料によると、おそらく学校側は沼川夫人の病状がわかり、何らかの便宜をはかって、昭和五年の三月から出張の名義で先に日本に帰らせたものと思われる。

(27) 沼川定雄の九州学院時代の生徒のうち、筆者が連絡をとることができたのはこの津末氏ただ一人である。津末氏を筆者に紹介してくれたのは沼川尚氏である。

(28) 藤井省三『台湾文学の百年』（一九九八年五月）、東方書店、一六二頁。

(29) 宋澤柔（本名廖偉竣）「不朽的老兵」（『師鐸』、一九七六年四期初載）、楊素絹編『楊逵的人與作品』（一九七六年）民衆出版社所収、二〇三頁。

(30) 内外の古典の小説の中で楊逵が特に愛読し、また多大の影響を受けたのはヴィクトル・ユーゴーの「レ・ミゼラブル」である。彼の文章の中では、ユーゴーのこの作品に言及されることが多い。おそらく彼がはじめて「レ・ミゼラブル」を通読したのは、彼が沼川定雄の蔵書の中にこの作品を見つけたときのことであろう。ただし、「レ・ミゼラブル」の舞台は大革命ではなく、七月革命の時のフランスである。

(31) 本名林瑞明、一九七八年九月、台北、筆架山出版社、五六〜五九頁。

(32) この「我的回憶」は「楊逵回憶録」という題の下に前衛出版社より刊行された『壓不扁的玫瑰』（一九八六年四月）と『楊逵的文學生涯』（一九九一年五月）にも収載されている。しかし、ここではなぜか沼川という名が次のように浅昭に変えられている。

「六年級是一位姓淺沼的單身年輕男性教師（恕我忘了他的名字）」。

また括弧の中の言葉「私は彼の名前を忘れてしまったが許してください」は「我的回憶」原文の方には見あたらない。

- (33) 台湾の試験地獄について楊達は後年まで大きな関心を寄せていたことは、『人民文庫』昭和十二（一九三七）年九月号所載の「試験地獄の緩和方法」や、『土曜日』昭和十二（一九三七）年五月五日所載の「チビの入學試験く臺灣風景（その一）」などの小文から知ることができる。

* 沼川定雄の調査を進めるにあたり、御協力御助言を惜しまれなかった皆様に、ここに謹んで感謝の意を表します。（文中敬称略）